

## 「これからは博多だ！！」

**対象：国連ハビタット福岡事務所長 野田順康**

**日時：2003年1月10日(金) 11時~12時半過ぎ**

**場所：国連ハビタット福岡事務所内**

**取材担当：永藪真澄、林奈那**

**草稿作成：林奈那**

### \*ハビタットとは

**林** まず、現在のハビタットでのお仕事を聞かせてください。

**野田** ハビタットというのは、住宅を中心とした街づくりの問題を扱っています。国連＝難民と考えがちです。確かに難民問題は非常に重要ですね。難民が発生すると直ちに食料や医療などを支援しないと死んでしまう。生命に関わる問題なのです。しかし、人間というのは人から物をもらう癖がついてしまうと、立ち直れなくなり、自立する意志が低下してしまいます。自立的に復興をすすめるためには、自分たちが生活する場、住める場所というのをまず確保することが重要。コミュニティ（地域の共同体）を確立し、難民が自立して生活できるような場を整備することが大事。我々の場合、もちろん住宅を提供するのだけれども、自分たちで作らせることが基本です。ハビタットが与えるものは技術的なノウハウと資材だけ。若干の資金的な援助もしているが、できるだけ自分たちで立ち直らせるということを主にやっています。今注目をしているのは『Post Conflict (紛争後の対応)』。我々が今知る限り、国連が紛争に対して援助支援のアピールを出している国は40あります。さらにテロ問題を付け加えると、約200ある国の3分の1は戦争・紛争を抱えている。世界の3分の1は戦争しているのです。戦争で一番影響・被害を受けるのは、子どもや女性などの弱者ですね。紛争がある程度平和に導かれた後にどうやって復興していくかが国連にとって一番大きな課題。ハビタットという組織も住宅や街づくりを通じて、紛争後の復興に重点をおいてやっています。

**永藪** 先ほど、街づくりをやっているとおっしゃっていたのですが、難民は自分の国にいられなくなって、第3国に逃げるわけですよね。街づくりというのは第3国で行うのですか。

**野田** いえ、街づくりは、難民たちが元の町に戻って生活できるように進めています。

**永藪** では、紛争が解決した後に、難民を呼び戻して、街づくりの支援を行っているのですね。

**野田** そうなんです。難民に対して「与える」という援助を行いすぎると、戻っていく、自立するという意識がだんだん薄れていく。そうならないためには、できるだけ早くもとの場所に戻して、コミュニティを再建し、生活の拠点である住居を作り、街を自分たちで

復興していくことが大切です。これによって自立していくことが可能になります。これが今一番発展途上国、特に最貧国と呼ばれる地域で大切なこと。しかし、難民というと皆さんはかわいそうと思い援助物資を与えてしまうじゃないですか。日本でも難民というと、ドカーッと寄付がくるでしょう。ほんとにそれでいいのかどうか考えないといけない。ほんとに人間としての尊厳、自立を考えると、どういう援助がありうるのか検討する必要があります。

### **\*博多の利**

**林** 福岡の街はどうですか。

**野田** 僕がしつこく福岡の人に言っているのは、いつまでも東京を見てたらだめですよということ。21世紀の日本の国土計画は、環黄海、環東シナ海の経済圏に着目しながら考えていかなければなりません。東京を見るよりも、中国・台湾・シンガポールそして韓国を見るべきです。東アジアで、どういう経済圏が発生してくるのかを21世紀は見据えていかなければならない。その場合、日本の経済の重心は西に移動すること、東京よりも博多の方がはるかに地の利がいいことを考慮しながら、福岡・博多の戦略を立てなければなりません。今博多がやるべきことは、急成長してくる東アジアの経済とどうやって結びつくのかを徹底的に考えることです。明治維新以降100年ほどの間に、東京中心の中央集権国家というものが確立し、なかなか博多の独自性や、地方からの国際化ができていくのです。僕は福岡ルネサンス、つまり、1000年前かそれ以上前の博多のことを思い起こすのが良いと強調しています。かつて、博多は日本の中でも最大の国際都市だった。中国語を話す人が多数いて、海外と交流をもっていた。そういった開かれた福岡というものを思い起こし、21世紀のアジア経済を考えた場合の日本の戦略をどうするべきなのか。僕はそれを国土計画の面から、つまり、北海道から沖縄までをどういうふうに機能分担させていったらよいかを考えています。そういう中で、九州は21世紀において重要な場所になることは間違いありません。

**林** そういう福岡という場所にハビタットの事務所があるというのはどういう意味があるのですか。

**野田** 日本の国際化を考えるのが僕のライフワークです。国土庁地方振興局で室長をやっていた時に、「国際機関を活用した地域振興事業」を立ち上げました。特に、ハビタット事務所を開設するにあたっては、アジアの玄関である福岡に是非国連機関を置きたいと考えました。しかし、多くの方は東京志向なので東京に置きたいと考えていたのです。もしくは横浜か、阪神大震災が起きた当時だったので復興対策をかねて神戸におきたいという意見もありました。いろいろな意見の中、将来の21世紀を見据えて、九州に国際機関がひとつくらいあってもいいのではないかと思い、福岡にハビタットの事務所を設置してもらったのです。これを起爆剤にして、博多という町から、国際協力や国際理解が進めばいいなと思っています。福岡事務所というと、駐日事務所、福岡で仕事をしているようなイメー

ジがあるのですが、実際はアジア太平洋事務所ということで、アジア太平洋 28 カ国を対象に仕事を行っています。日本の他の国連事務所、たとえば UNICEF や UNHCR などは駐日事務所で主に日本のことをやっているのです。日本からアジア太平洋全域を担当しているのは、ハビタット福岡事務所だけということが言えます。最初の 5 年間は、僕が目指した国際機関を活用した地域の国際化という観点が欠落していました。そのため、このハビタットの事務所をもっと活性化したいという強い要望もあり、短期間だけでも私が所長をやることになりました。去年の 4 月ごろは、ヤフーでハビタットを検索すると約 1000 件表示されていたのですが、徐々に認知されるようになって、今ハビタットを引くと約 6000 件出てくるようになりました。いろいろな活動を行うことによって、着実に福岡に、または日本にハビタットという組織が根付いているという実感があります。私は、発展途上国の街づくりや住居作り、紛争後のコミュニティ作りなどを主な仕事としているのですが、そういうことを題材として捉えながら、少しでも日本社会の国際化や日本人の国際理解を進めていきたい。

**永藪** 国際化の拠点として福岡を選び、その起爆剤としてハビタットの事務所をもってきて、これからやろうとしている施策はあるのですか。

**野田** 去年の 12 月から、県と一緒にになってハビタットの知名度の向上を進めていますが、具体的には小学校やいろんなところで講演をしています。

**永藪** 小学生にはどのようなことを話されるのですか。

**野田** 小学生に対しては、あまり難しいことは話さず、国際協力の重要性や国際理解とはどういうことなのかということをお話しています。特に最近は個性化といわれるようになってきたけど、まだまだ日本は同質社会です。それが根本的に日本が国際化できない原因となっている。異文化をいかにして取り入れるかというのが非常に大事であり、それぞれの文化を尊敬しないといけないということをお話します。日本のように先進国で経済的に豊かな国でも、厳しい競争で精神的にだめになることもある。そういうストレスの大きな社会に比べて、フィリピンのようにのんびりとして、所得が低いかもしれないが家族が楽しく暮らし、コミュニティが豊かな国とどちらが幸せなのかということを考えないといけない。そのような国からも学ぶべきところは多くあり、尊敬していかねばならないし、そのような生活もあるということを受け入れねばならないということをお子供たちに話します。異文化理解ということですね。

### **\* 学生時代に学んだことは一生ものだ**

**林** 野田さんの学生生活はどのようなものでしたか。

**野田** スキーの選手でした。スキーは小さい頃からやっています。

**林** 出身はどちらですか。

**野田** 僕の出身は京都。京都の北部の出身で、1 時間くらいで雪山にいける距離だったので、

小さい頃からずっとスキーをやっていました。学生時代は北海道で競技スキーの選手をやっていました。スキーに明け暮れた学生時代だったので勉強はほとんどしなかったけど、大学院の2年間はみっちり勉強しました。それが今の僕のベースとなっています。学校教育は社会で通用しないと言う人もいるけど、それは違うと思っています。皆さんの思考パターンの原点は学校教育で培われるもの。だから今学んでいるものが、これから必ず社会に出て考えるベースになりますよ。そういう意味でやはりきちんと勉強した方がいいのです。僕は国土計画というものを学び、開発計画論をやってきましたが、大学院時代から、自然と人間社会との共存・共栄ということが、われわれ地域計画をやる上での命題でした。僕の思考としては、1945年から約60年間で作ってきたものを、日本の国土が持っているポテンシャルとか、自然の形態とか、川の流れとか、山と海の関係などというものを考えながら、21世紀は、日本の国土を再整備していく時代。できればもっと美しい国土というのを作っていききたい。過去60年間というのは、非常に急速な高度成長をしたので、非常に荒々しい国土を無理やり作ったのです。その弊害がいろいろなところまでできました。だから、もっと自然との関わりというものを考えた国土計画を進めていかなければならない、というようなことを学生時代に考えていました。今考えている日本の国土計画はその延長上にあります。これらは全て学生時代に学んだこと。今でも大学院時代の本は読み返しますよ。

**林** 大学院に入ったのは、大学に入ったときから行く決めていたのですか。

**野田** いや、大学3年間勉強しなかったんで、少しは勉強した方がいいのではと大学3年の時に決心して、大学院で勉強することになりました。

**永藪** 大学院を卒業する時に、公務員か民間で就職かなどで悩みましたか。

**野田** 僕はいろいろな企業を受けましたよ。例えば、商社に入って開発をやろうかと思った。商社は、国家的なプロジェクトや開発プロジェクトなどいろいろなことをやっているからね。海外でそういうプロジェクトをやろうと思った。しかし、公務員試験に合格し、通産省と国土庁に内定をもらい、僕は計画論を勉強していたので国土庁に入って国土計画をやろうと、国土庁を選びました。

**永藪** 学生時代に自分のベースとなるようにしっかりと勉強して自分のこれからの人生に影響してくるようなものを学んでいった方がいいですね。

**野田** 日本の教育の問題点は、小学校の頃から金太郎飴的教育になっていることです。いまや中学時代から受験勉強し、日本の中のエリート社会に入るために、よりいい大学を選ぶ。そのために、自由な勉強をせず受験勉強ばかりやっている。ある特定の分野を勉強したいという意見を許さないのが日本の教育です。無理強いをして勉強し続け、大学に入るまではという思いでみんなが大学に来るため、大学に入ったら遊ぶ。人間にはキャパシティーがあるので、集中している時間が無限にあるわけではない。どこかで一休みしないといけないので、日本の学生は大学に入って一休みをしてしまうのです。一休みをする時間は大事かもしれないし、その時間にいろいろなことをやるというのはいいと思います。し

かし、最近はいろいろなこともやらないで、のんびりと何もやらないで過ごす学生が出てきました。一時期は勉強した方がよいと思います。ある時期集中して勉強することは大事だし、きっとそれが永遠に残るものとなる。あとは on the job training で力をつけていけばよい。どっちにしろ一生勉強ですよ。

**永藪** 野田さんの話しを聞いて、福岡の可能性に改めて気づきました。今後、野田さん自身が、小学生や中学生などへの講演以外に福岡でやっていこうと思っているものは何ですか。

**野田** 一つ考えているのは、企業の若手とフリーディスカッションをやる機会を設けたいです。国連ハビタット福岡事務所を支える企業の協力委員会があるのですが、入社 6 年から 10 年くらいの若者が何を考えているのかを知りたい。21 世紀を背負っていく彼らは、2040 年頃に日本が中国に並ばれる瞬間を見ることになるだろう。その彼らが中国をどう見ているのかが知りたい。もし彼らが中国を下に見ているようでは、希望は持てないでしょう。そういう将来推計は、経産省の通商白書に書いてあるのだから、中国に並ばれ、追い越されるということを日本政府は認めているということです。それを民間の人々がどこまで真剣に受け止めるか、そして、受け止めた時にどういう action を起こしていくのか。今、日本は経済大国になっているので、みんなが守りに入っています。新しいことに挑戦していく気概もなくなっています。しかし、守るのは攻めるよりもずっと難しいし、攻めるよりもうまく退く方が難しい。だから簡単な方を選ぶ、つまり攻めるに限る、というのが私の信条です。そういう気持ちを若い世代も持っているのか、または、先の世代が経済大国にしてくれた、その上にあぐらをかいているのか。後者の方だったら、あっという間に日本は中国に抜かれるでしょう。日々前進して、挑戦するという意識を持っていかなければいけない。だから経済界の若者の意見を聞いてみたいと思います。

**永藪** 野田さんのお話しを聞いたらきっと刺激されるのではないのでしょうか。

### \*中国というボリューム

**林** 中国と日本社会の違いは何でしょうか。

**野田** 中国社会では競争なんていうのは日本の比ではありません。12 億の人間がひしめいているのだからね。そういう中で、もまれてもまれて人間が出てくるのだから、向上心が非常に強くなります。日本の学生と中国の学生は目の輝きが違う。中国には寝ている学生なんていませんよ。みんなが必死になって勉強している。たとえそういう学生が 1%だとしても、1200 万人のスーパーエリートが出てくることになるのです。

**永藪** 中国の人がこんなに勉強しよう、とか発展させようとかいう意識を生み出させるものは何でしょうか。

**野田** うーん、それは競争でしょうね。人間がそれだけ集まれば競争が自然に生まれる。

**林** 日本人にはそういう競争意識はないのですか。

**野田** いや、同じように、日本人にも競争意識はあります。例えば東京はやはりニューヨ

ークと同様に、激しい戦いがある。結果として、立派な人材が排出されているのも事実です。しかし、東京のようなやり方がベストとは思っていません。東京とニューヨークの競争社会も全然違いますよね。地方都市にもいいところはたくさんある。地方の個性が出ていいと思います。ただ、ある面では攻撃的に前向きにやっていくということが大事。情報・通信基盤などが整備されてきたので、東京にいても福岡にいても情報は変わらない。足りないのは発信力。東京ばかり見ているので、新しい視点の攻撃的な情報を福岡から発信できていないのです。九州の中では、福岡が九州の拠点になっています。拠点は拠点としての責任があるのです。九州は人口が約1千2百万人で、大体オランダと同じくらいの人口を持っているのだから、オランダ一国と同じくらいの首都としての責任が福岡にはあるのですよ。そのようなことを真摯に考える人たちが大学にもいないといけないと思います。つまり、九州大学の学長さんや先生方が何を考えているのかが重要になってきます。世界の流れ的には collaboration、つまりどうやって協調していくのかというのが大事。九州は九州の展望があり、それを本州なり、中国大陸なり、朝鮮半島なりとどうやって協調していくのかという、自分たちのポジション、アジア太平洋地域のどこに位置し、将来的にどのような役割を果たしていくのかということを考えなければなりません。

### **\*ハビタット=まちづくり！**

**林** 今後のハビタットの中でのお仕事はありますか。

**野田** 国際協力の姿を考えると、ハビタットとしては住民が個々に自立することを中心に進めるべきだと思っています。難民がより早く自立生活に入っていけるようなシステムを作ることが重要だというメッセージを日本国内、また、海外に発信していきたい。なかなかハビタットというコンセプトを理解するのは難しいです。UNICEF という子どもとイメージしやすく、UNHCR という難民とイメージしやすい。そういう延長上で、ハビタットという街づくりや復興、つまり、住民の自立なのだイメージしてもらえるようにメッセージを送っていきます。それが私のライフワークでもあるのです。私はいろいろなポストで仕事をしてきましたが、どこにいても国際感覚を失わないようにしています。国際的に見て、まず自分たちがどの position にいるかということを中心に考えなければいけません。日本の国土計画でも必ず考えなくてはならない。昔は非常に国内的な計画だったので、国際の「こ」の字もありませんでした。日本国内の経済をどうやって発展させるかという計画だけ。しかし、もうそういう時代ではなくて、世界の中で自分たちがどの辺にいるのか、将来的にどうなるのか、どういう役割を果たせるのかということを考えれば、きっと、国土計画にしても、地域計画にしても、福岡市の発展計画にしても良いビジョンが作れるのだと思います。

**永藪** いつも視野が世界を見ていらっしゃるんですね。

**野田** 世界の中で自分たちというのは、どういうようなところにいるのか、20年後はどうなっているのかを考えていきたい。

### **\*何歳になっても挑戦**

**永藪** 最後に、今の若者へ向けてメッセージをお願いします。

**野田** 日本経済というのは成熟期に入っています。上から下までみんな成熟化している。若い人たちまで成熟化している。しかし、非常に長い将来を見据えた時には、絶え間ぬ挑戦というのをやっていかないとはいけません。若いということは、そんなに安定を求める必要もないわけだし、失敗してもやり直しがきく。だから、常にチャレンジしてほしい。若い時には、自分の可能性を信じて、健全な好奇心を持って新しいことに挑戦してほしい。そういう mind を持ってほしい。私はこの歳になっても挑戦しているつもりです。

### **\*継続は力なり**

**林** 将来野田さんのように国際機関で働きたいと思っている若者へのメッセージはありますか。

**野田** 僕の座右の銘は「継続は力なり」です。僕がこういう国際的な仕事に携わったのは、もう 20 数年前になるのだけれども、その後も絶え間なく、どんなポストにいても、仕事に関係なく国際協力をやり続けてきました。そういう気持ちがあれば自分の思いはかなうから、思い続けることが大事。それから国際的なことをやりたいというのであれば、僕はいつも「変人のススメ」を説いています。それは個性化という意味。個性化すると大体変人になるから。だけど、国際社会というのはある意味変人社会なので国際社会では変人でないとやっていけません。日本の standard で動いていくとなかなかうまくいかないのが国際社会です。あと、英語はしっかり勉強した方がいいですよ。まずは英語です。

**林** 大変貴重なお話をありがとうございました。

**永藪** これから日本を支えていく若者たちにとってもいい刺激、励みになることだと思います。